

[報告]

国際バラトウインスキー学会に参加して ——あるいは、中央ロシアへの旅の覚書——

三好俊介

まさに「国民的」祝祭の観を呈することになったプーシキン生誕二百周年に遅れること一年、詩人エヴゲーニー・バラトウインスキーの生誕二百周年祭はひっそりと、ごくつつましやかに営まれた。もちろん、「国民詩人」の場合と違って、華やかなセレモニーも、洪水のような研究書やエッセイの刊行も行われなかったのではあるが、人々はこの、ロシア哲学抒情詩の「父祖に対して／彼にふさわしい墓を捧げた」のである。すなわち、詩人が後半生を過ごしたモスクワ、領地経営のために何度も訪れたカザン、そして故郷のタンボフ——彼ゆかりの三都市においてそれぞれ、曲がりなりにも「国際学会」と題した会合がもたれ、この詩人を愛する人々ないしは、この詩人に“はまってしまった”人々が出会い、親睦を深め、議論を闘わせたのである。

「実生活の月並みな呼び声と同様に、／そして日常の些事の束縛と同様に、／わかるだろう、あなたには、／疾風にも似た情熱や夢見ることの楽しさが」——この詩人の代表作である詩集『たそがれ』冒頭の詩句を思わせる経緯によって、筆者はそうした学会の一つに参加することになった。新学期のあわただしさの中で日常の雑事に溺れていた私は、中央ロシアの黒土地帯に位置する都市タンボフの消印が押された、見覚えのない筆跡の手紙によって、突然に詩の世界に引き戻されることになったのである。「国際学会——バラトウインスキー学の新たな一頁」（2000年6月7～9日、於タンボフ州郷土博物館、国立タンボフ大学・タンボフ州文化局など主催）に筆者を誘ってくれたのは、一面識もないL・エフチヒエワ氏（タンボフ大学助教授）であった。どうやら、七年ほど前に近隣のミチューリンスク市を訪ねた際に地元の新聞記者や文学研究者に伝えておいた住所が、巡りめぐって氏のもとに行き着いたらしい。「あなたの発表は学会のプログラムに含まれています」——A4の紙一枚に印刷されたほとんど脅迫的な参加要請（むろんエントリーなどした覚えなどなく、そもそもこんな学会が行われることさえ初耳だった）を前に一瞬呆然とした私であったが、幻想的なま

でに美しい夏の中央ロシアの光景が鮮明に思い出され、一旅行者(それも七年も昔の)にすぎない自分が記憶されていた嬉しさも手伝って、参加を決意したのだった。

ロシアや欧米で学会発表をする人々も増えている昨今だが、モスクワやペテルブルクといった大都市ならともかく、地方の田舎町での学会に参加するというケースは比較的まれであるように思われる。こうした地方都市での学会については、参加者の人数、報告のレベル等々、ある種の問題が存在することはもちろんだが、その反面、場合によっては大都市での学会では得られないメリットが生ずる場合もある。このようなことについて考えながら、中央ロシアへの旅の雑感を綴ってみたい。何かの参考になれば幸いである。

地方の学会の場合、まず参加者数の問題がある。特に遠隔地の場合、プログラムの上では「大物」も含め多数の報告者がエントリーしていても、いざ当日になってみるとあらかたキャンセルというケースはままあることである。タンボフに先立って、カザンとモスクワではすでに生誕二百年を記念するバラトウインスキー学会が開催されており、カザンのぶんについては報告集も刊行されている(モスクワの報告集も、「ルースキー・プーチ」社より刊行準備中とのことである)。モスクワはそれなりに盛況だったようだが、カザンの学会は報告集を見る限り、若手の院生中心のようであり、報告内容のレベルも様々である。またカザンの場合、一応「国際学会」と銘打たれているとはいえ、国外からの発表者はドイツからの一名(他にベラルーシから一名)だけである。この点はタンボフについても同様で、国外からの参加者は私一人だった(G・ヘッツォら、招待者のリストに載っていた欧米の大家が一人も姿を見せなかったのは残念だが、私が参加したことで辛うじて看板どおりの「国際学会」になったのだ、つまり少しはバラトウインスキー研究の国際化に“貢献”したのだ、と考えて無理やり納得することにしている)。また、6月といえばロシア各地の大学では学年末の試験シーズンたけなわということもあり、その余波でA・ペスコフ(いまや詩人研究に不可欠の資料となった労作『バラトウインスキーの生涯と創作の年譜』の編者である)に代表される、モスクワやペテルブルク在住の研究者があまり姿を見せなかったのも残念であった。

こうした事態はモスクワの南東はるか400キロというタンボフの地理的条件を考えれば、もとより致し方のないことではある。正直言って筆者も当初から、参加者の顔ぶれというよりは、通常のアカデミックな学会にはないもの、詩人の生まれ故郷という“場”のもたらす一種独特の雰囲気とでもいうべきものに期待していたところがあ

ったが、実際、その意味では非常に充実し、かつ楽しい驚きに満ちた学会だったと思う。モスクワ市内のカザン駅を真昼に発ち、カザフスタン行きの列車に揺られて八時間（この路線には外国人観光客はまず乗らないだけに、車内の空気はきわめてロシア的あるいはカザフ的であり、日本人とわかると相部屋の乗客から質問攻めにあう）。日暮れ時にタンボフに着くと、プラットフォームの夕闇のなかから、豊かな顎鬚を蓄えた仙人然とした紳士が歩み寄ってきたが、彼は同じ列車で到着したV・アンドレーエフ氏（ミチューリンスク大教授）で、この学会の主幹事の一人である。市内の高級ホテルの個室を予約していたはずの私はそのまま彼に連れ去られ、以後三日間を事実上ほとんど彼と相部屋で過ごすことになるのだが、タンボフ駅に降り立ったばかりの筆者はむろん、自らを待ち受けているそのような運命については知るよしもない。

学会参加者の大半は街外れの森の中に佇む安ホテルに宿泊し、そこから連日、殺人的に揺れるマイクロバスに乗って市の中心街（「デルジャーヴィン通り」——タンボフは18世紀の大宮廷詩人デルジャーヴィンゆかりの街でもある）に位置する会場と一緒にでかけていった。アンドレーエフ氏に“拉致”された結果、私も彼らの安ホテルに入り浸ることになり、こうした一連の行動をとともにしたのだが、この選択（事実上、強制だったが）は後から考えると正解だった。森の中の簡素な宿泊所は参加者たちに日常の生活を忘れさせ、精神を集中させるには絶好の舞台装置であり、彼らが街中の高級ホテルを避けたのは単に宿泊費を惜しんだからというわけではなかったのである。完全な静けさの中で私たちは、地酒「タンボフの狼」の杯を傾けながら、時のたつのを忘れて文学談義等々にふけたのであった。

報告者の顔ぶれは、すでに記したように地元の学者が中心だったが、一般的に言って彼らのバラトウインスキー研究に対する貢献度は地味ながらも、なかなか無視できないものがある。とりわけ、『エヴゲーニー・アブラモヴィチ・バラトウインスキー資料書誌』（1989）は、今のところこの詩人に関する研究書誌としては最大のものであり研究者必携の一冊だが、タンボフでの刊行ということもあり、その存在がほとんど知られていないのは残念である。この書誌を編んだA・ソボレワ氏には今回の学会の席上で初めてお目にかかることができた。気さくな中にも気配りを欠かさず、学会の雰囲気盛り上げ和ませるためには労をいとわない、明るく上品な婦人であった。バラトウインスキーというとどうも、暗い詩ばかり書いた変な詩人というイメージがあるせいか、この詩人を研究する人間もあたかも変人であるかのように見られがちだが、しかし、こうした見方は日本では正しくても、世界的な視点からいえば大いなる誤解である。今回の学会の参加者は東洋から来た約一名を除き、みな快活で魅力的な

紳士淑女たちであった。

冗談はさておき、参加者たちの多くは実際に、いい意味で肩の力が抜けていたとでもいうべきカーブンガクに対して妙に構えることをせずに、詩について考えるのを心底から楽しんでいるかのようなようだった。梅雨のないロシアでは最も軽やかな六月という季節に、豊穡な黒土地帯（本当に炭のような色の土壌である）の只中に位置するタンボフという都市のトポス、さらには生誕二百周年という祝祭の気分が加わり、参加者たちの心を浮き立たせる要素には事欠かなかったのではあるが、やはり決定的だったのは、狭くアカデミックな意味での文学研究者だけでなく、実に様々な立場の人たちが参加していたことだろう。報告の内容は伝記的研究からテキスト分析の試みまで多岐にわたり興味深かったが、特に、一日目の基調講演の際には一般市民も多く来聴し、会場の大講堂は一種異様な熱気に満ちており、地元の国営テレビの取材班さえ入っていた。来聴者の態度はみな熱心で、彼らの中にはタンボフで処女詩集を刊行したばかりの若い詩人の姿もみられた（はにかんだような表情の中にも眼差しに凜とした意志を漂わせる女性だったが、「女流詩人」などと野暮な呼び方をするのはやめておきたい）。こうした雰囲気には圧倒されつつ、やはりロシアは詩の国なのだと実感した筆者であった。

報告者数こそ少なめだったが、分科会（伝記的研究および作品研究の二会場に分かれて行われた）での報告は大半がよく準備され、内容も多彩だった。伝記的研究のセッションでは文学博物館関係者（多くは、モスクワ近郊ムラノヴォの「バラトウインスキー・チュツチェフ旧居博物館」および、カザンの「バラトウインスキー博物館」館員）たちの報告が、堅実でゆきとどいた調査によって好感を抱かせた。作品研究では、科学アカデミー付属ロシア語研究所の研究者（N・コジェヴニコワ、L・シエスタコワ両氏）が言語面からの作品分析を行っていたのが新鮮だった。それぞれの部会においては、モスクワの国立プーシキン博物館の美術工芸修復専門家（V・ラスストリギン氏）や、「ルースキー・プーチ」出版社の編集者（A・タルホフ氏）も加わり、それぞれの識見に基づく報告を行っていた。大学院生クラスの若手も三人ほど参加しており、とりわけスモレンスクからわざわざ参加した院生のひたむきな発表態度には学ぶところが多かった。質疑応答は総じて穏やかな雰囲気のもとに行われたが、明らかに準備不足と思われる少数の報告に対しては、厳しい指摘が浴びせられていた。

遠来の客に対する礼儀ということなのか、筆者には分科会ではなく、冒頭の基調講演中の時間が急遽割り当てられた。基調講演としてはやや場違いな微細にわたる作品分析で、内容も拙いものだったが、会場は拍手を惜しまず、散会の際には多くの人が

励まし(?)の言葉をかけてくれた(ただし、次々と漢字でのサインを懇請されたのには当惑した)。「私は生きているのだから、この地上には／誰か私の存在をいとおしむ者もあろう。／遠い子孫が私の存在を／詩行のうちに見出して、ひょっとしたらわが魂は／彼の魂と交感し、／同世代に友を得たように／私は後世に読者を得るのかもしれない」(『私の才能は乏しく、声の響きも高くはない……』)——バラトウインスキーのこの予言が的中したことを、来聴者たちは突如舞い込んできた日本人によって確認し、楽しんでいるかのようなようだった。まあ、本音を言うならば、お祭り気分の漂う基調講演などよりも、一般研究者の報告する分科会に回してもらったほうがさらに冷静な質疑応答が交わせたはずであり、その意味では主催者の「配慮」はやや有難迷惑だった。ただし、報告後に多くの研究者や詩文学愛好家たちから頂いた激励は、筆者にとっては何物にも代えがたいものであり、やはり、ああいう形で報告する機会を与えられてよかったのだと思っている。

怠惰のそしりを免れないだろうが、筆者がロシアを訪れるのは今回が七年ぶりになる。七年ぶりのモスクワは少なくとも表面的には、ここまで変わったかと絶句するほど一変していた。幹線道路の両脇や国立図書館(旧レーニン図書館)の屋上には広告塔が林立し(その数と云ったら、モスクワの例の枕詞「四十の四十倍」どころの話ではない)、かつて足繁く通った中心部の古本屋や安食堂は一掃され、瀟洒なカフェやブティックにとって代わられていた。モスクワ芸術座の隣の古書店「プーシキンの店」が唯一、重厚な内装と少し小皺の増えた店員たちとともに、変わらぬ姿をとどめていたのが救いであった(ただし、都心から少し外れた地区には趣味のよい古書店がいくつか新しくできている)。

対照的にタンボフは、少なくとも筆者の目には七年前とほとんど変わっていないように見え、古きよきロシアという印象である。もっとも、土地の人の話では停電やら何やらで、実際にそこで生活するとなると気苦労が絶えないようである。外国からの訪問者にとっても気苦労は無縁ではない。私の場合、パスポートの内務省への登録に若干の問題があつて、色々大変であつた(周知のように、ロシアでは訪問する都市毎にホテルを通じ、あるいは辺鄙な土地では直接に、身分証の内容を内務省の支局に届けなければならない——『死せる魂』の描くようにゴーゴリの時代から存在したこの風習に、外国人はチチコフに倣って、今日でも従わなければならない)。もっとも、頑なな官僚主義と人々の情の深さが奇妙に同居しているのがロシアというものであり、この面倒な手続きの過程で相談に乗ってもらった内務省職員は(歳のころ二十前後の

美しい女性である——土地の人の自慢話を信用すれば、タンボフ近辺はロシア美人の産地である由)、問題解決後には親切にも目抜き通りを案内してくれ、華麗な円柱で飾られた19世紀の本物のアンピール建築とスターリン時代のまがい物の見分け方(一見そっくりだが風格に於いて全く異なる二つの建築様式が混在しているのは、モスクワも地方も同様である)を教えてくれたのみならず、研究発表終了後に催された詩のタベでは目のさめるような夜会服で登場し、ロシア貴族の令嬢さながら優雅に扇を使いながら、バラトウインスキーの詞による小歌曲を歌い、満座の喝采を浴びていた。

こうしたタベに代表されるように、今回の学会はエクスカッションや余興が充実しており、遠来の客たちを精一杯もてなそうとする主催者の配慮と苦勞のほどが推察されたが、とりわけ、まる一日をさいた詩人の生家跡の訪問は印象に残った。バラトウインスキーの生家は、近郊の小都会キルサーノフからさらに少し離れた、マールと呼ばれる地所に存在した(ちなみに、キルサーノフは古い市場の石造建築が印象的な、19世紀そのままに止まった時間の中に佇んでいるかのような静かな町だが、私たちを歓迎して純白の夜会服姿の中学生たちが、微笑ましいロシア歌曲のミニ・コンサートを開いてくれた)。詩人の家屋敷は彼の生前からすでに荒廃し始めていて、そのありさまは名詩『荒廃』で甘美なメランコリーの中に歌われている。さらに、革命後は破壊の度合いがますます著しく、いまや往時の建物群は完全に姿を消してしまった。現在、前出のアンドレーエフ氏らが、復元に向けて資料の集成と資金集めに情熱を傾けている。

当日は幸い天気にも恵まれ、参加者たちは童心に返ったかのように歌など歌いながら、相変わず殺人的に揺れるマイクロバスで草原を抜け、途中の集落では区長さんや民族衣装姿の娘さんたちの「パンと塩」の歓迎を受けながら、詩人の生家跡に到着した。記念すべきこの瞬間に私はテレビの取材陣につかまり、「なぜ遠い日本に住むあなたがバラトウインスキーなど研究しているのか」という素朴な質問に対して、カメラの前でしどろもどろになるという醜態を演じた(今から思えば、要は「いい詩を書いたから」と一言答えればよかったのである——まったく、詩を研究するのに他の動機などありうるだろうか)。次いで、草原の中に立ち並んでいる詩人の親族の墓(本人は、ペテルブルクのアレクサンドル・ネフスキー修道院でドストエフスキーらとともに眠っている)を訪れ、『荒廃』にも登場する木々に覆われた窪地を散策し、悪名高いロシアの水道水とほぼ同じ物質だとは到底信じられぬ、軽やかな風味の湧水を味わった。詩人の生前とかわらないのは、この谷間の泉だけであつた。

こうした体験、さらには参加者たちとの懇談を通じて、筆者の中ではバラトウイン

スキーという詩人のイメージが多少変わったような気がする。すでに述べたように彼は難解な哲学詩を書き、そこでは生の不条理が時にかなり悲痛なトーンでうたわれているものだから、私たちはそうした詩をつい“構えて”読んでしまいがちだ。彼の詩のほの暗さは、明るいユートピアへの夢が強制されたソビエト・ロシアでは当然のことながら批判の対象になり、一方、私たちはしばしば、そうした偏見に遅ればせながら反駁するかのようになり、ほの暗さの中に垣間見える詩人の「哲学」を声高に再評価しようとする。だが、詩人の愛した生地の穏やかな光景や、彼を「哲学詩人」としてではなく形容詞抜きの「詩人」として受けとめ愛そうとする人々を前にして私は、バラトウインスキーというのは、もう少し気楽に読んでもいい詩人なのだと思うようになった。たぶん、この詩人にあつては、息詰まるような思索と、未知なる読者への愛、故郷の美しい自然と素朴で気さくな人々への追憶——これらもろもろが絡み合い、有機的な一つの世界を形成しているのだ。それゆえに、彼の哲学詩は、まるで抒情詩のように自然体である。彼の詩はどんなに重く陰鬱な内容をうたっていても、古典的調和の響きから逸脱することはない（そういえば、バラトウインスキーのうちに知性と洞察力の過剰を認め、「彼の一言一語は彫刻刀だけでなく、やすりの跡をもとどめ、その詩行は決して急くことはなく、流れさえしない」と評したのは大作家トゥルゲーネフだが、彼はしかしこうも書いている——「われらの偉大な古典の時代の残響が、バラトウインスキーの詩形の中に聞こえる」）。

バラトウインスキー観の深化（？）もさることながら、なんといっても今回の学会に参加した収穫は、この詩人を媒介として、研究者であるなしにかかわらず様々な人との胸襟を開いた会話や付き合いができたことであろう（作家や文学作品をこのように人付き合いに“利用”することは個人的には嫌いではないが、それは作者と読者、あるいは読者相互の交流を希求し、その思いを「思考の広場」という詩句で綴ったバラトウインスキーの影響かもしれない）。一々挙げればきりが無いが、例えば日本がらみの話題ということなら、エクスカージョンに参加したタンボフの古老は、足下の道路が抑留日本兵によって造られたのだと教えてくれたし、取材に来たテレビ局の若いカメラマンは仕事こそ硬い表情だったが、撮影が終わると人懐っこい笑顔を見せ、撮影機材（日本製だがかなり旧式である）をもし落としでもしたら一生かかって修理代を弁償しなければならない、とぼやいていた。

こうした密度の高い人間関係を享受できた点について感謝しなければならないのは（雰囲気作りに労を惜しまなかった主催者を別にすれば）、大草原——いわゆる「ステ

ップ」——の存在だろう。人気のない草原に果てしなく取り囲まれていると思うからこそ、人間関係が濃くなるのである。マイクロバスで隣り合わせた男性が車窓の外に目をやりながら、「ロシア人はこの大草原の中で迷子にならないように、手を取り合って生きてきたのです」と言うので、なるほどと思った筆者だったが、この顎髭を白く豊かに蓄えた大柄の男性こそ、モスクワ郊外ムラノヴォの「バラトウインスキー・チュツチェフ旧居博物館」（正式名称は「ムラノヴォ旧居博物館」）のV・パチュコフ館長であった。

学会を終えてモスクワに戻った後、氏は親切にも筆者を自家用車で博物館に連れて行ってくれたのだが、このムラノヴォとの再会は大いなる感激だった。七年前、膝まで雪の中この博物館を訪ねた私は、そこではじめて、全館が修繕のため長期閉館中であり、再開の時期も不明だと知った。ほとんど人影もない一面の雪の中、ひっそりと佇む赤レンガの建物と初代館長キリル・ピガリョフ（チュツチェフ研究の大家である）の墓を呆然と眺めていた気持ちは、七年経った今でもよく覚えている。私の胸中も冬であった。「冬がやってくる…… たわわに稔った金色の穂に／楽しげに輝いていた畑も、／生も死も、豊かさも貧困も——／過ぎ去った一年のあらゆる形象は／一様に積もった雪に／平たく覆われるだろう——／君の前にこれから開ける精神世界も、そのようなもの。／しかも、君は今後そこで収穫を得ることはない！」——人生の不条理をえがくバラトウインスキーの大作『秋』の一節を、思わず口ずさんだものである。

だが、七年待って私はついに収穫を得ることになった（バラトウインスキーがなんと言おうと、日本には「桃栗三年、柿八年」という諺がある）。初夏のムラノヴォは一面緑で、牧草に覆われたなだらかな小丘に抱かれた池のほとりに、こじんまりとした屋敷が佇んでいた。現存する建物は最晩年（といっても四十歳そこそこである）のバラトウインスキー自身の設計になるもので、質素な中にも端正な気品を湛えた英国式煉瓦建築である。ただし、内装はそうしたつつまじやかな外観とはうってかわり、ところどころ太い木材が剥き出しになった武骨な造りだが、そこに詩人の性格の発露を見ようとするのは穿ちすぎかもしれない。ここで詩人は妻子とともに後半生のかなりの部分を送り、閑居同然の生活の中で傑作詩集『たそがれ』を完成させたのだった。彼の死後、屋敷はその友人で詩人チュツチェフと縁戚関係にもあったN・プチャータの手に渡り、こうしたいきさつで現在はバラトウインスキー、チュツチェフ両詩人の記念館になっている（ただし、展示の多くはチュツチェフ関係である）。庭園の中央をロシア貴族の邸宅にはつきものの、いわゆる「暗い並木道」が横切っているが、た

たとえばヤースナヤ・ポリャーナ——言わずと知れたトルストイの屋敷である——の大河小説を思わせる堂々たる並木道とはだいぶ趣が違って、道幅も木々のシルエットも全てが端正である。詩的な端正さこそ、この屋敷全体を貫くキーワードなのである。

タンボフで顔なじみになった学芸員たちが館内を案内してくれたが、学会での情熱的で生き生きした表情とは打って変わり、すでに博物館員にふさわしい冷静な「プロの顔」である。パチュコフ館長がため息混じりに語るところによれば、博物館の来訪者は年間一万人程度。単純計算では一日あたり三十人そこそこというわけで、採算をとるのもなかなか大変だろう。しかしながら、この小さな博物館は単なる展示品の陳列にとどまらず詩人研究のうで極めて刺激的な活動を展開しており、その奮闘ぶりには驚かされる。とりわけ特筆すべきは、『チュツチェフの生涯と創作年譜』（T・G・ディネスマン他、1999年に第一部が出たばかり）の刊行事業、そして、『たそがれ』完全復刻版の刊行（2000）である。

バラトウインスキーの生前最後の詩集にして最高傑作である『たそがれ』（この見解については異論も出そうだが、少なくとも私の目にはこの詩人は歳をとるほど腕をあげているように見える）は、彼の晩年の不人気により存命当時は僅か百数十部しか刊行されず、その後に版を重ねることもなかった。したがって大変な稀覯本であり、私もこれまで原本を閲覧する機会には恵まれずにいた。今回160年ぶりに初めて刊行時そのままに（正書法や余白の取り方にいたるまで原本に忠実に）復刻されたこの詩集を一読してみると、従来思い描いていたイメージとはあまりにもかけ離れており驚きを禁じえない。今日の学者が校訂した研究論文つきの分厚い全詩集の中に収まって古典の威厳を燦然と漂わせていた『たそがれ』の面影はそこにはない。頁数は九十たらず、厚さは五ミリ程度だろうか（なにしろ、収録作品集はたった二十七篇なのだから）。ごくつつまじやかな外観は詩集というより、何かの取るに足らないパンフレットのようなものである。百部あまりしか存在しなかった、このいかにも地味な書物の中に、詩人の生涯における最良の果実が凝縮されていたのである。だが、書物としての外観もさることながら、さらに興味深いのはその中身だ。この詩集の頁上には際立って余白が多い（こうした余白は、『たそがれ』を「復刻」したと標榜する従来の全詩集においては紙幅の都合からか全て割愛されており、私も含め今日の一般読者にとっては初めて目にするものである）。詩集というものがもともと余白を多くとる書物であるのはいうまでもないが、それにしてもこれほどの多さは少し異様である。このことはタンボフの学会でも指摘されていた（タルホフ氏）が、私もやはり、『たそがれ』上の余白には、詩篇本体にさえ劣らない重要な意味がこめられていると考える。この、

いわば「余白の詩学」については別の機会に（紀要の巻末の“余白”などでではなく）、詳しく論じることができればと思う。要するに、作品を正確に評価し味わうためには不可欠な情報のいくつかを、私たちはこの復刻版によって初めて手にしたわけで、このような書物が出たのはまさに驚嘆すべきことである。ただし、奥付を見ると刊行部数は僅か五千部。どうやら、『たそがれ』は永遠に幻の書物でありつづける運命らしい（筆者に一部贈呈してくださったパチュコフ館長に感謝したい）。紙質はほとんど新聞紙なみで、カバーには協賛企業のロゴが踊っている。財政難の中で、採算のとれない文化事業をなんとか継続しようとする博物館の苦闘がうかがえ、ただただ頭の下がる思いである。

『たそがれ』に深入りしすぎてしまった。要は、感傷に溺れて物見遊山をしていたわけではなく、知的な興奮もちゃんと味わっていたのだと弁明したかったのである。さて、このムラノヴォでもタンボフ同様、忘れられない出会いがあった。敷地の一角にはチュツチェフの末裔が住む別棟があり、彼らはあたかもムラノヴォの風景そのものと同化したかのように菜園を耕していた。詩人の旧居を望むテラスで紅茶をご馳走になりながら彼らと談笑した時間は、短くはあったがきわめて心地よいものだった。屋敷の中にはこじんまりとした教会があり、筆者の訪問した日は正教会の祭日であつたらしく、館長以下、職員やその家族、近隣の住民たちが集まってミサを執り行い、教会の地下室（天井の低い半地下の空間で、窓からわずかに差し込む光が聖像画をぼんやりと照らしている——このような神秘的かつ幻想的な空間が存在するとは教会の外観からはとても想像がつかない）で昼食をとった。彼らと信仰を分かち合うわけではない筆者も、ミサでは気を使って一応十字を切っていたのだが、切る向きが逆だと参列者から注意され泡を食った。一瞬、叱責されたと誤解した筆者であるが、実際は親切心から教えてくれただけで、彼らはその後も私にミサへの参列を許し、快く昼食会の席に招き入れてくれた。

本題から逸れてしまうが、昼食会の様子はロシア人の生活の一端を活写するものであつたと思われるので、この際、ざっと記しておきたい。教会の地下で、しかも聖像画に囲まれ、坊さんににらまれながらの食事というと、どうも砂を噛み線香でも齧るような食事会なのではないかと想像されがちだろうが、そんなことはない。手作りの料理（精進料理ではない）は大変美味で会話も弾み、そして、皆が会話に疲れてきたころを見計らってやっと司祭がおもむろに説教を始めるのである。まだ若く、二十代の顔立ちの司祭（どことなく『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャを思わせる控えめな青年である）の説教が決して長広舌に陥ることがないのを会食者たちは知ってい

て、好意的な敬意をもって耳を傾けている。説教が終わると、また元のように食卓に会話に戻ってゆく——このプロセスが会食の最後まで繰り返される。沈黙と会話のバランスが程よくとれていて、非常に気持ちよく食事ができるような“システム”なのである。会食者たちはみな敬虔な信者であるが、頑迷固陋な雰囲気はなく、司祭も含めて“新しもの好き”で日本製や韓国製のビデオやデジタルカメラの話を好み、実際にその場に製品を持ち込んでいる者もいた。聖と俗が互いに自然に補い合うような絶妙のバランスに、ロシアにおける正教会と人々の日常生活の長く深い関わり合いを垣間見た思いがし、願わくばロシア正教会にはこうした方向性によって（くれぐれも国政への介入などによってではなく）存在感を増していったほしいものだと、改めて感じさせられた次第である。

以上、文字通り雑感に近いことを書き連ねてしまったが、筆者が体験したことのおよその雰囲気は伝えられたのではないかと思う。バラトウインスキーという詩人のイメージを脳内で反芻しつつ、一週間足らずでタンボフからムラノヴォへと中央ロシアを駆け抜けた旅であったが、この小旅行を一言で形容すればやはり——気障な形容になるが、「意外性」と「出会い」に過剰なまでに恵まれた旅であったように思う。単に学術的な研究成果をやりとりするだけのつもりが、信じがたいほど様々な人々と話す結果になった——しかも、初対面の研究者と三日間相部屋で過ごし、さらに偶然の知遇がきっかけで、ムラノヴォでも展示物の閲覧にとどまらぬ興味深い経験をすることができ、入手困難な資料まで頂くことができた。みな、日本を発つときには予想だにできなかったことである。確かに、研究報告の質や量という点からいえば、モスクワの学会のほうが充実していただろうし、あくまでもこうしたことを重視するならば、地方の学会は避けたほうが無難である（タンボフの学会も書面参加者のものも含めて報告集を刊行する予定になっているのだが、いまのところ刊行されたという話を耳にしない——資金面などで行き詰まっているのだろうか）。しかし、モスクワの学会で、果たしてこれほどの濃密な人間関係の網の中で楽しく浮遊できたかどうかは、帰国前の数日逗留した首都のドライな雰囲気を考えると、いささか疑問である。

ノーベル賞詩人ブロツキーは若き日に、バラトウインスキーの詩集に偶然出会ったことがきっかけで詩に開眼したという。このような詩人の学会に参加して、多くの思いがけない出会いに恵まれたことに何か因縁めいたものを感じる。ムラノヴォを去り際に、パチュコフ館長から印象的なエピソードを一つ聞いた。つい先ごろ、チェチェン戦役の指揮をとっている内務省軍の高官がムラノヴォを訪れ、静かに一帯を散策した後、再び戦地に戻っていったのだという。詩人との「出会い」に將軍は何を求めた

のか。そして詩人は戦地の中にある彼に何を与えたのだろうか——この詩人について考えるべき問題がまた一つ増えたようである。

参考までに、バラトウインスキー博物館の所在を記しておく(タンボフは計画中)。近くをご旅行の際は、立ち寄られるのも一興であろう。

(ムラノヴォ) Музей-усадьба «Мураново»

141281. Московская обл., Пушкинский р-н, Мураново, Москва市内ヤロスラヴリ駅発近郊電車「アシューキンスカヤ」駅下車4キロ。

(カザン) Музей Е. А. Боратынского

г. Казань, ул. Горького 25/28.